

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成21(2009)年

10月号

通巻 470号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

発行日 平成21年10月23日
発行所 大倭出版局
〒631 0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44 0015
印刷 大倭印刷製
定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



木馬(1969.5.3 奈良県川上村にて) 奈良市 川端 一弘さん撮影(文・7頁)

平成6(1994)年10月23日 月次祭法話より

鈴虫にひらめく神ながらの大法

法主 矢追 日聖 (満82歳)

鈴虫と人間

暑いでもなく寒いでもなく、ちょうどいい気候になりました。

今年はずちの茶の間で、鈴虫をたくさん飼っていました。ナスビやったりキウウリやったりして、お母ちゃん(鈴月力アさん)が世話してくれてね。

ところが、十日くらい前からなるかね、ボチボチ、鳴き声が聞こえなくなってきた。時期が来たら鳴かんようになるんかなあとと思って見ていると、メスばかりが元気に残っていました。

鈴虫はオスが鳴いて、メスは鳴かない。オスが羽をこすりあわせて、あの鳴き声を出している。一種の音楽やね。

それが昨日になると、そのメスも死んで、もう一匹くらいしか残っていない。

旬が来たら、オスが鳴く。旬が来たら、オスが死んでメスだけが残り、タマゴを産む。旬が来たら、そのメスも死んでいく。自然の成り行きと言ったらそれまでやけれども、鈴虫のこの現象ひとつの中にも、大宇宙の摂理、神ながらの大法が含まれておるんです。大宇宙創成の自然神、大神さん、大倭で言うとお加天腹大神ですが、その大法がはたらいているんですね。

虫一匹にしても、目の前の木一本にしても、みんな自然神、大宇宙の神さんのおかげによって、この世に生まれ、それぞれの寿命を生き、そして消えていく。われわれ人間にしても同じなんです。

鈴虫は一ヶ月が二ヶ月の寿命だけれども、人間は五十歳、八十歳で死ぬ、あるいは百歳になって死にます。鈴虫より生存期間は長いけれども、そこに大宇宙の摂理、大神さんの大法がはたらいているのは変わらない。人間も鈴虫もみんな、同じことなんです。

人は生かされている

その大法の力が、われわれの心臓を動かしています。自分が動かしているのところが、宇宙創成の自然神、大神さんが動かしてくれているんです。そのことを世の中の人々は忘れて、大間違いを起こしていると思うんや。

この世の中が人間だけの世界やというような、そんな横着な考えでおつたらあかん。われわれは人間の力だけで生きているんじゃないんです。虫であろうと植物であろうと人間であろうと何であるうと、全部、宇宙の大神さんのおかげによって、こつして育まれ、生きさせてもらい、存在させてもらってあるんです。

近頃、自然を大事にせえとかよく聞くんですが、口で言うだけだしに、この事実をまず大前提としなければいけない。神さんの心というか、お慈悲というか、それを忘れてもたら本当に困るんです。

宿命とお役目の相互扶助

宗教的な見方から言えば、鈴虫のような虫一匹でも、牛でも馬でも、他の動物でも、生き物はすべて、宇宙の大神さんの指図通りに、天地自然の神さんから与えられた宿命にしがたって生きています。

ただ宇宙の大神さんから与えられた宿命、お役目は、植物であるか動物であるか人間であるかによって、それぞれ違います。人間には人間としての宿命、お役目が与えられておるんです。

しかし、われわれ人間には、難儀なことに他の動物とは異なる点がいくつもあります。たとえば知識が邪魔をする。それからまた喜怒哀楽がある。喜びとか悲しみとか、腹を立てるとか、いろいろ人間は持っていますから、これがやっかいですね。仲良くせよと言ったつてね、口で言うのは簡単ですが、それがなかなかむずかしいんやな。

鈴虫に生まれた虫は、今言うたような形でだんだんと消えていくんですが、さつき、その手すりでもカマキリが歩いてました。カマキリはカマキリの特徴で、自然の摂理通りに生きてるわけです。また雀には雀の、猫には猫の、犬には犬の、牛には牛の特徴があつて、みんな違うから、われわれが見たら、あれは猫、あれは犬と区別できるんですね。

人間の場合には、ひとりひとりに、それぞれに与えられた宿命というもの、お役目というものがあります。けれどもそれは、ちよつと見てすぐに犬や猫を区別できるようには分かりません。まして自分ではなかなか自覚できないと思うんです。

強欲な人もあれば、すぐ腹を立てる人もおる。おれば、それが戦争に生まれてけんかが好きになる人もおる。とにかく、いろんな性格があります。ライオンに生まれればライオンの性格通りに動かし、犬に生まれれば犬の性格通りに動くというのと同じなんです。

ところが私たちには頭があつて知識があります。それによって、これは良いことだとか悪いことだとか判断できるし、諦めるところは諦めもす

るといふように、大宇宙の大神さんは、われわれ人間に考える能力を持たしてくれておるんです。だから、どんな性格に生まれていたとしても、人と仲良くしていくことはできるはずなんです。相互扶助の精神でお互いに助け合つていかなければいけません。大神さんは、人間ひとりひとりに、それだけの能力を与えてくれているんですよ。

私も飯も食わなければならんし、着る物も着なければならぬという時に、自分一人だけだったら、なんにもできません。食べ物も着る物も、みんな人が作ってくれています。そんなふうにして、力を借りて、自分がこつして生存できるんです。

人はひとりひとり天職と言いましようか、食べ物を作るお役目の人、着る物を作るお役目の人というように、さまざま能力、特徴、宿命を持っております。それをお互いに表に出すことによって、仲良く助け合つて暮らしていきけるようになっている。人類は、大自然からそう仕組まれているんやと思います。

仲良くするということとは簡単ではないけれども、私はみなさんに、仲良くしてほしい。

「大倭神宮伝承の紀」のこと

今年の八月十五日が、大倭の数えの五十年に当たります。それでその時に私が、ふにやふにやとしゃべらせてもらったことが、今月号の『おやまと』に掲載されています(平成6年10月号「大倭50年記念 大倭神宮伝承の紀発刊にあたり」。「大倭神宮伝承の紀」は、ながそねの息吹307頁所収、その一部分を次頁に掲載しました)。

私の話は、自分のその時の感情……感情いうたら、なんや語弊があるかもしれんけど、思惑とい

うかね、まあ、ひらめきと言ったら一番いいかな、そんなものに基づいてしゃべらせてもらっています。あらかじめ準備して、論理的に考えて言うてるんやないんです。ひらめきのままに、衝動のままにしゃべっているからね。

今日、見させてもらって、編集部の方で、わりあい上手に文字にしてくれています。話しているのを聞くのと、書いたものを読むのでは、ちょっと違うと思うんやけど、大倭五十年の記念のことなんで、一応、読んでおいてもらいたいと思います。すつと読むだけだと、分かりにくいところもあるかと思いますが……。

まあ、しゃべっておることやから、統一がないんですよ。文章かて、無茶苦茶なところあります。でもこれは、私の特徴だと思って読んでくれるといい。私は嘘は言っていないつもりなんです。たとえそれが、世間の常識から外れたことであつたとしてもね。

神話世界の靈視

たとえばここ(平成6年10月号)に、**大國主命**とか、**長曾根日子**のことが書いてあります。

大國主命というたら、出雲大社に祀られている神さんやと、まあ誰でもそういうように認識されておるでしょう。そして長曾根日子(長髓彦)というたら、神武天皇と戦争した国賊やというような認識を、古い人は持っていると思います。

それに大國主命は、私が靈界を見とつたらね、**饒速日命**と同じ神さん、同一の人物なんです。

はるか後の時代の人が作った伝説によって、別々の神さんとなっているんやけど、大國主命を拜んだかて饒速日命を拜んだかて、同一の神さんが出てくるのやから、私は、これは同じ人物なのだ

と思つています。

そういうように、私が言うことや書くことは、『古事記』や『日本書紀』の歴史とは違っています。今から千三百年前の『日本書紀』にこう書いてあると言つても、それは、その時代よりはるか昔からの伝説を寄せ集めた記録ですし、あつちにもこっちにも似たような言い伝えがあつて、ほんまか嘘か事実は分からない。そんなものが、古代の歴史になつてはいるんです。

矢追日聖はけしからん、大國主命と饒速日命を一緒にしとると学者が言うたつて、その学者かて真実は分からへん。世の中、そんなもんや。私は私で、でたらめや嘘でなく、私が見たことを言うてるのやからね。

それからまた、大國主命が出雲にいたとか、土地を天照大神に返したという国譲りの神話があります。あの神話はね、ヤマトの長曾根日子大王が神武天皇に近畿の政權を渡したという話と、混同してはいるんですよ。

饒速日命は、百何万年も昔の人やというねん(『ながそねの息吹』255頁「日本民族太古のふるさと」長曾根の国を偲ぶ」など参照)。そんな昔の人が、長曾根日子の時代に出てくるはずがない。ところが言い伝えというのは、時代がごつちやになつてしまふものや。『日本書紀』では、饒速日命が長曾根日子を殺したと書いてあるけれども、饒速日命は百何万年も昔の人なんやから、長曾根日子を殺すはずがないんです。

私の言うことを、疑つても、信じてても、どちらでも構わないんですよ。ただし、否定する根拠も信じる根拠も、あなたたちにはないと思います。だから、矢追日聖はこんなことを言うてるのやなあと思つて読んでもらつたら、それが一番ありがたいです。(文責・編集部)

【抜粋】

大倭神宮伝承の紀

平成6年8月発行

大倭神宮

(現)奈良県奈良市中町二一四七番地
(旧)大和国添下郡鳥見庄中村字藤ノ木岸ノ上
(鶏ノ森)

太古、「ヤマト」は畿内一円を指す広い地名で、「親元(故郷)ノオヤモト」の訛りである。

この神宮の地は、古代から「オオヤマト(大倭)」と伝えられて、我が民族の元初祖靈、並びに、累代の遠祖の鎮まり給う「太加天腹」だったのである。

・奇稲田日女命の御終焉の靈地

亦の名、櫛名田比売、歳徳玉女神。

・建速須佐緒命の因縁の靈地

亦の名、牛頭天王。

・奇玉饒速日命の降誕の聖地

亦の名、大國主命、天照國照彦火明命、大物主命、及び、天火明命とも言い、右の建速須佐緒命を父とし奇稲田日女命を母として、この大倭祖神の靈地にて降誕された。後世、この命の徳を讃えて多くの別名ができたのである。

この三柱の命を我が民族の元初祖靈と崇め奉り、「大倭大國魂大神」と称えまつりて、後世に伝えてはいる。

特集 私と戦争 (下)

続「長崎8人兄弟物語(次男コウゾウ)」抄

今回も井手泉さん御兄弟の聞き書きを続けてい
る根本千絵さんのブログより、井手幸蔵さん(大
正11年生)の戦争体験をまとめさせて頂いた。

コウゾウさんは、兄弟の中で唯一、戦時中外地
へ出征した。その体験から、帰還後めつたに口を
きかなくなり、「人が変わったようになった」と
母親の梅子さんは心配していたという。コウゾウ
さんは、「人間が変わりました。軍隊に入ったら
変わらなくてはやっていけないし色々ありまし
た」と千絵さんに話している。

長崎より上京、多摩美術大学に入学。後に明治
大学政治経済学科に転入したコウゾウさんは、
『方丈記』にあこがれていたが、風雲急となり、
とにかく生き残るために、柔道をしたり、満蒙開
拓団との訓練、新潟の飛行場建設のための森林開
墾等に参加したりして体を鍛えた。また将来のた
めに、あらかじめ軍人勅諭、歩兵操典、戦陣訓も
完全に暗記した。

昭和18年12月1日21歳の時、学徒出陣で久留米
の予備士官学校に入り、長崎県大村市の陸軍歩兵
第47連隊に入隊。(本隊の烈師団は、激戦地ビル
マ、インパール戦線に行っていた。コウゾウさん
はこの本隊を追って出征して行く)

昭和19年10月10日、フィリピン・マニラへ向か
うため下関を出港、3日後、佐世保に停泊。

「朝霧の彼方には佐世保市が見えるので、母方
のいとこ達や祖母を偲んでいると、長崎にいる家
族への想いに我を忘れ、あの時ほど軍歌を心底か
ら歌った事はありません。」

ああ 堂々の輸送船

さらば祖国よ 栄えあれ

ちぎれるほどに振った旗

遠い雲間に また浮ぶ」

台湾の高雄港を出てバシー海峡にかかるまでの
事、コウゾウさん達を乗せた12艘の船団は、午後
8時過ぎ敵潜水艦による魚雷攻撃に遭う。火柱が
闇をコウコウと照らす中、船団はバラバラになり
悲鳴をあげて逃げ回った。7艘は海の藻屑となり、
1万5千人が犠牲となった。おそらくこの船団が
フィリピン・マニラへの最後の船団だったので
ないか。後にもスマトラ沖で魚雷にやられ泳いで
助かった経験を話している。

マニラでは、毎日米軍の空襲を受けながら、高
射砲陣地の雑務や弾丸の移動整備をしていた。そ
してジャワ島のスマランからマレー半島のシンガ
ポール、クアラルンプールへと本隊を目指した。
「敗戦までシンガポールのラッフルズホテル
(昭南館という名で日本軍将校の宿泊所に接収)
で南方軍野戦補充司令部要員となり、シンガポー
ルを通過する全ての部隊を原簿と照合して、行き
先別に編成し、前線から要求あり次第直ちに輸送
便を直行させる命令書を作る事務をしていた。」

私達は常に重装備の戦闘体制で行動せねばなら
ず、引率した部下に犠牲者も出た。私達学徒動員
の下級将校は消耗品にすぎなかったのです」

この時期、飛行機はレイテ沖戦で全てやられ南
方にはなかったたので、航空見習い士官兵は、皆ス
マトラへ送られ特務機関兵(スパイ)にされたた
う。軍服を脱いで長髪にし民間人としてふるま
う。戦友と口をきいてもいけなかったようた。

やがてコウゾウさんにもラングーン(ミヤン
マーのヤンゴン)司令部へ急行せよと命令が下る
が、「ついに最後の幸運にめぐり遭う。敗戦であ

る。命拾いしたのも天皇の命令だった。ナントナ
ント!! 南海の果てに誰か故郷を想わざる! 誰
かわが生を想わざる! クアラルンプールからシ
ンガポールに引き返してラッフルズホテルに投宿
した時ほど、大木敦夫の詩「言うなかれ、君よ別
れを……」の情感に涙した事はなかった。敗戦の
一時間前に死んだ戦友達の無念をいかんせん!」

「敗戦になると、南方軍の不穏な言動を抑える
ため、皇族を使者にして派遣したんです。東久爾
宮殿下の息子だったかが視察で来た時のパイロッ
トが学徒出身で、ラッフルズホテルに泊つたのを
機に、「僕は生きてるから!」って長崎の響写真
館(実家)に届けてくれと手紙を託しました」
コウゾウさんは昭和21年秋帰郷。一年はイギリ
ス軍によって、シンガポール港外にあるレンバン
島(無人島)の開拓を強いられた。「レンバン島は
恋飯島。実につまみ表現でしょ。メシがコイシイ、
コイシイと敗残兵は泣きました。復員する頃は道
路もでき、マレー半島のようにゴム林やヤシ林も
整い、病院も棧橋つきの波止場も完成しました。
マンガローブを切り開いてどうにか島によじ登
った当初の苦労は夢のまた夢でした」

さて最後に、今年の8月9日、千絵さんがプロ
グに綴った文章の一端を紹介して締めくりたい。
「事実を少しでも知れば事実の持つあまりの
衝撃にえぐられる。不合理に震える。こんな事が
あってよいのかと誰でも思う。こんな思いを他の
誰にもさせてはならぬと思う。その言葉にならな
い個人個人の気持ちだけを信じる。だから今から
でも事実を知って欲しい(私も探りはじめたば
かりだ)。オバマにもヒロシマ、ナガサキに来て見
て欲しい。64年の間、日本そして他の国でも自分
達の出来る事を訴え続けた人達がいる。

NO more HIBAKUSYA 被爆者と一緒に堂



廃墟と化した浦上天主堂。S21年冬?井手桃太郎さん(長男)写。本紙9月号の関連の記事、「モモタロウ・ムツコ抄」をご参照下さい。

おのき、なぜ?どうして?と問い、絶望し、生き残った自分を責め、生きて行くために試練と変換し、口を閉じ、封印し、忘却しようとして、それでもフラッシュバックに怯えながらも生きなければいけなかった。
昭和20年8月。あの原子野で風景を失った少女達の震えには決して迫れなくても、祖父母の世代の想いを受け継いで動き出した高校生達(高校生一万人署名活動)に私も願いを託す。
是非、ブログをご覧下さい。(文責 李章根)

特殊潜航艇と柳本柳作を訪ねて

兼田 隆

私が戦史に興味をもったのは、日本海海戦に参加した海軍軍人である祖父の影響があったからだと思えます。三角帽子をかぶり、軍刀を持ち、軍服をまとった古い写真を見ると今でも背筋が「ピン」と伸びる気がします。

小学生の頃、軍艦のプラモデルが流行った時期がありました。勉強は不得意でしたが、艦名や艦

々と誰も言えなかつた。被害者であるのに二重の差別と排除と隠蔽を受ける構造……。
一瞬にして失われた風景と愛する全てのものに怯え、

歴など、直ぐに記憶できた様に思います。(本当は賢いのかも!)

この様な事もあり、特に海軍関係には強い思い入れがあります。
海軍関係の遺品・建造物・博物館・石碑は日本各地に残っています。特に明治中期から太平洋戦争終結までは横須賀・舞鶴・呉・佐世保を中心に鎮守府と言う海軍の役所が置かれ、所属する軍艦が多数ありました。現在、港湾には海上自衛隊の基地があり、日時によっては護衛艦の艦内見学ができ、自衛隊のPRに一役かっています。

今年の8月から9月にかけて、舞鶴・呉と佐世保・平戸に行ってきました。今回はその一部ですが、呉の倉橋島の事と平戸の事を記事にさせていただきます。みなさんは「特殊潜航艇」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。「特殊潜航艇」とは定員2名、魚雷2本を装備した小型潜水艦の事で、日本海軍の秘密兵器で、遠くハワイ・シドニー・マダガスカルにも出撃しますが、帰還する確率は凄く低かったとの事です。



①

呉の倉橋島には、この秘密練習基地があり、跡地を訪ねてきました。倉橋島の大迫地区と大浦崎地区の2ヶ所に基地があり、両基地跡には碑が建立されています。碑には、600名の訓練生があり、出撃して戦死した者は439名になったとあります。波多見地区の八幡神社の脇

には「嗚乎特殊潜航艇」という立派な慰霊碑が、昭和45年、関係者有志により建てられています(写真)。
長崎県平戸市の崎方公園には、平戸出身の柳本柳作という海軍軍人の墓があります。航空母艦「蒼龍」の艦長として数々の海戦に参加されました。

ミッドウエー海戦において、「蒼龍」は攻撃を受け、大火災がおこります。柳本自身も大火傷をおいながら艦橋で指揮を取り続け、部下達が力づくで下船させようとして試みますが応じず、生存者を最後まで見送り、「蒼龍」と乗組員718名と運命を共にしました。柳本柳作の墓の周辺は、5月初旬には真紅の平戸つじが咲き誇るとのこと。ここから見える平戸の海原は絶景です(写真)。



②

交差点12

東京都台東区 中野 泰宏

昨年の『おおよまと』6月号で、編集部と関西棋院の中野泰宏九段が、愛生園を訪ねたニューズを伝えましたが、その折の感想を含めた文章を、平成20年7月18日発行の『月刊 中野通信』に書いておられます。中野さんのご厚意で、今回転載させて頂くことになりました。

5月31日(土)、6月1日(日)と岡山県の瀬戸内

市にあるハンセン病の療養所を訪ねてきた。奈良で囲碁の会を一緒にしている杉本順一さんのお話を聞いて、機会があったら行ってみたいとお伝えしていたのだ。ハンセン病のことは詳しく知らなかったが、指が不自由になってモスブーンですくて石を置くという話を聞いて心が動いた。

「杉本さん
らい病、ハンセン病……という病氣、そして伝染病として扱われ治療の名目のもとに療養所への隔離……。話や多少の文章で知っただけでは計り知れないほどのものが、やはりあの島にはあったのだと思います。」

奈良から3時間のドライブで着いたその島は、それはもう、拍子抜けしてしまうくらいに美しい自然に囲まれていました。そして少しだけタイムスリップをしてみましたような感覚。島の方のお話を聞かせて頂いている時、どこか遠いところの話を聞いている感じで、そしてとても眠たくなってしまう。当事者の方から大変なことをお聞きしているというのにです。

その後、小田弥市さんのお宅を訪ねてお話をさせていだいていた時も、自分が想像していたような重たいものは今はそれほどなく、島の気持ちの良い空気と同じように普通の人の生活がそこにあるかのように錯覚してしまいました。

(小田さんと)いざ対局となり、しばらく使っていないかったというその碁盤を前にしてようやく、島の真実を少しだけ知ったように思います。ツルツルの盤上に無数の小さな傷。それは、今までに見たことのないものでした。指がうまく使えなくなつた手で碁石を置くために、スブーンを使う。そのスブーンによって磨かれ、そしてつけられた痕は、光を放っていました。もしかしたら島全体の自然の美しさも、その光

と共通するものがあつたのではないかと今にして思います。美しい空、海、たくさん緑の花。そして生き物達。溝の流れや陸地にたくさん居たカニには、何かが宿っているような存在感がありました。患者の方が船で着いたという棧橋のたもとに咲いていた美しい花。それらをデジタルカメラに収めました。帰りの車中に操作ミスで全部消してしまいました。残念とは思わず、想いの宿つたものを持ち帰らずにすんでほつとした、と思つています。

昨日、小田さんからハガキが届きました。その刻み込むように書かれた文字を見て、やはり、何十年かの時を越えて届けられているように思えてなりません。」

大阪に戻ると、関西棋院に台湾棋院から若手6名が来ての対抗戦だった。6月2、3、4と打たれて9勝9敗。関西棋院の選手は初段から六段までの若手が勢揃いしてこの成績なので善戦した方だと思つ。僕は毎日観戦と、食事や遊びを一緒に過ごした。



ご先祖様

今、心の中で手を合わせます。ご先祖様、神様。私はいただいたこの機会に何を書かせて頂いたらいいのでしょうか。

浮んで来るのは、白い漆喰の土蔵の壁です。私がお実際には見たことはないのですが、小さい頃より祖母から聞いていた、静岡の実家の古い屋敷の庭の一角だと想像します。そこにはきつと井戸がありました。そして夏草があまり手をかけられていないせいか茂っています。

東京に戻ると、フランス代表(5月末に日本棋院で開催された世界アマ選手権)のピエールが我が家に3泊逗留した。彼は弱視、目が不自由だ。碁を打つのも普通の碁盤では難しく、盤上の線を太く書いた碁盤をデスクライトで照らしてようやく打てるようだ。フランスでの予選や世界選手権の本戦もそうして戦い、5勝3敗の好成績で賞を貰っていた。

僕とピエールの関係はこうだ。

僕の師匠の森野節男九段は以前から視覚に障害がある方への碁の普及に熱心で、ピエールのことも昔から日本に招待しようとしていた。僕は去年の春にフランスに遊びに行った時にマルセイユでピエールと会つた。

そして今回、大会を含めて約1ヶ月の日本滞在中、何かと一緒に過ごす機会が多かつたのだ。それにして6月12日に成田空港まで送つたあとには疲れがたまっていた。彼との会話は主に英語で、僕は電子辞書と彼のジェスチャーが頼り。そして外出の時は周りに気を配る必要があつたので気疲れしたのだと思つ。

高知市 松本直之

私の実家は静岡の街道筋に江戸時代初期から続く庄屋の家でした。その村の90パーセント以上の土地を所有し、村人の殆どが小作人という、封建制度の中、さぞかしお大仁な暮らしをして来ただろう家でした。

私の手元に何枚かの写真が手渡されており、髪をはやし山高帽を被り、腕組をしている背の高いおじいちゃん。素晴らしい重厚な仕立てだと白黒でもわかる服を着たおばあちゃん。虎の

毛皮を羽織りほほえむおじい様は、かの満鉄の重役だったそうです。

そんな血統の家では恵まれた者も相当頑張らねばならず、ましてはどこかうまくいかない者はどれ程のプレッシャーを受けて生きていかなければならなかったか、想像だに難くありません。それは世界恐慌で経営していた個人銀行が破たんし、大戦後の農地解放であらかた土地を失い、お化け屋敷と言われかけていた屋敷に辛うじて家族がひっそり住んでいた時にも続いていました。

そう、うまくいかない人間はこの家族にはいてはならないのです。それで私の祖父は、私が物心つく頃には、新しく建て直された母屋には入れず、裏のボロボロの小屋で一人浮浪者のように住んでいました。

実の子供である母は、子供達におじいちゃんはいないと教えていました。私はご飯の時間になると裏にいる、じいじと呼ばれる変な人に、「ご飯を取り来な」と呼びにいく係りでした。そのじいじはよく子供達に手を振ったり近づいて来たり、お菓子を汚い手で渡そうとするのです。母は無視するように教えました。

ある日学校から帰ると見慣れない青ランプを付けた車が家に来ていて、人だかりがすくく私は家にしばらく入れてもらえませんでした。おばあちゃん疲れきって人に囲まれ座っていました。

あのじいじは鎌をもって祖母を追い回したというところで病院に入ることになったんだと、後で近所のおばさんから聞かされました。

後日、たまたま近くにあった鉄格子のはまった病院のそばで友達と遊んだ時、私達をじっと見ていた人が手を振ってくれたのが怖くて、無視したその黒い人影を思い出します。夕暮れでした。離れてもずっと見ていました。

更に後日、初めて友人達に連れられ、大倭病院の横の坂道の入り口にたどり着いた時、私は道につつぷし吠えるように泣きました。随分長い時間、友人は待っていてくれました。

私は初めての感覚に襲われていました。私の中から次々に沢山の人が出て来て泣くのです。見たことも話を聞いたこともない沢山の人の思いが、その人の見た風景が、噴出するように出て来るのを、私はびっくりして見ていました。

その中に土蔵の土壁に爪をがりがりたててもがき苦しみながら日々をおくり死んでいった誰かの気持ち掻き集めるように進み出て来ました。何かの理由で閉じ込められ世間からは存在を消されて生きざるを得なかった思い……。

簡単にそういうものを感じました、ハイ終わり、私は言ってしまうていいのでしょうか？ もちろん違つと思います。

ただその後紹介して頂けた杉本順一さんは私の話を聞いてくれた後、「ご自分の家族の話もして下さりあなたのご先祖さんはいたいそう苦しんでる、と言ってく下さいました。

私の知っている祖父がなぜあいう生き方をしなくてはならなかったのか、そして私自身一時期なぜ、自ら望むように、家族からわざと離れ、浮浪者に成りかかるような暮らしに転落していきこうとしてたのか、そういうえば、あの日から、ありていに言えば私の人生は持ち直したのです。普通に仕事を勤められるようにだんだんなってゆきました。わけのわからぬ対人恐怖とそれに由来する周囲への誤解の積み重ねは少しずつ薄くなって来ました。

おじいちゃん、ごめんね。ありがとう。
ご先祖様皆様、一緒に生きていきましょね。

表紙写真によせて

川端 弘

上流からギイーギイーと軋む音に一瞬何事かと緊張した。小さな角を曲がると材木を運び出す木馬が現れた。急いでカメラを取り出し夢中でシャッターを切つた。その40年前の光景が今でも眼前に浮かぶ。昭和44年5月3日と記録された写真である。奈良県川上村大滝での体験で、大阪万国博が開催される一年前である。

先日NHKで、保津川下りの若い船頭が、昔に筏流しがあったという話を聞き、その再現を実現した放映があった。今ではすっかり無くなつてしまつた林業作業の一齣である。木馬での材木運び出しもその例外ではない。

木馬とは写真のように山道に梯子状に枝々を敷き固定し、その上を修羅に材木を載せ滑らすように運び出すのである。その作業は一見簡単であるように見えるが、たいへん危険を伴つもので、少しの急斜面でも木馬が暴走し、その下敷きとなり命を落とされる方も多かつた。

材木を機械を使って運び出すまでは、木馬や筏流しは長い歴史をもつ運び出しの技術であつた。それらは過去の技術となり、その技術伝承者は高齢化し少なくなつた現在である。もう10数年もすれば経験者はまづたたくいなくなるようである。

当時、私は休日を寺社や史跡ばかりでなく街道筋をよく歩いた。それは高校入学試験後の春に大阪より富田林まで歩き、親戚宅をベースにして一週間に廻り歩いたことから始まる。その頃はまだまだ民家にも江戸時代や明治の面影を残すものが少なくなかつた。時はまさしく戦後の高度成長時代であつた。日本中が新しいものに向かつて進んでいた時代である。しかし、古いと言われた伝統あるものを無闇に破壊した時代でもあつた。

あじさい日誌

9月13日 裸会。本紙8月号「宗教の根本——自分個人への心の修養」をテーマとした話題を深めました。

この日、馬場田のお米作りでお世話になっている成川忠之さんの母富美子さんが帰幽され(享年94歳)、お通夜が行われました。(14日葬儀告別式)

9月14日 大倭神宮境内の、隣家に接している樹木が専門家の手で整備されました。

9月15日 大倭神宮月次祭。

9月19日 午後6時から西齋庭で、「弥栄おどり」実行スタッフ

フ達が野外パーベキューで反省と慰労の会をしました。

9月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和39年9月23日の月次祭法話をお聞きしました。オープンリールの録音テープを、CD化して頂いたものです。

9月24日 須賀道(大倭病院から菅原園までの坂道)沿いの大樹の剪定がクレーン車を使って行われました。

9月27日 昇ちゃん、平群町の山上憲一さんの畑で芋掘りとそれを洗う作業に参加。休耕田活用で焼酎になるそうです。

9月26日 夜、交流の家でF.I.W.C定例委員会。今夏の韓国・中国・愛生園等でのワークキャンプ報告が行われました。

10月4日 稲刈りの予定でしたが、前後の天気予報によって急遽12日に延期となりました。

10月6日 大倭神宮月次祭。雨のため社務所で行われました。

10月7日 紀伊半島に接近した18号台風は、お陰さまで紫陽花

邑では枝や葉が多量に落ちていたり、大倭会館の屋根が一部めくれていた程度でした。

10月9日 永坂まゆりさん(横浜市)来邑、前夜の奈良豆比古神社の翁舞いを見て来たそうです。

午後8時から教務本庁で本紙『おおやまと』編集会議。毎月、発行前と発行後の2回やつています。まず

気の動きが先、アレコレ自由に雑談しています。飛び入りも歓迎!

11月3日(祝)

9時から田んぼで脱穀をした後、大倭会館で昼食。(美味しいお好み焼きです!)

11月23日(祝)

新しいお米で拜殿にお餅をお供えした後、12時より大倭会館で昼食会(赤飯)をします。

どうぞどなたでもご参加下さい。

連絡先: TEL 0742-41-4615 (玄徳院)

大倭安宿苑より
10月1日 人事異動。第三経理課長に石田透さんが採用され、茂毛路園の施設長に矢追明昌さん・副施設長に窪田公和さん、八重垣園の施設長に山本睦美さんがそれぞれ就任されました。

(菅原園)

10月5日 お好み焼きとホットケーキで住居者自治会主催のパーティを行いました。

(須加宮寮)

10月4日 映画会で「がばいばあちゃん」を上映しました。

(長曾根寮)

9月21日 (デイサービス) 敬老の集いと誕生会。八重垣園の方の大正琴、ボランティアさんのピアノ、新人職員によるゲームで演芸会を行いました。

(特養) 敬老の集い。各フロアで誕生会を行った後に、バイキングの昼食を楽しみました。

(茂毛路園)

10月9日 各ユニットで誕生会のお祝いしました。

(八重垣園)

投句箱より「亡き人を思ひ出させる彼岸花」

俳句の風物

上田森彦(99歳) 打水や萩より落ちし子かまきり 高野素十

残暑の夕べ、庭の草木が水欲しげ。雫と一緒に落ちた子かまきりが小さな鎌を立てている。話があつて来たようなしおからとんぼ(自由律) 森彦

第21回大倭会文化講演会

(共催: NPO法人むすびの家)

日時: 平成21年11月8日(日)

午後2時より

場所: 大倭紫陽花邑 拜殿

(近鉄学園前南口より赤嵐山行きバスで国際ゴルフ場下車、徒歩すぐ)

講師: 矢部 顕さん

タイトル: **モラ一ツのアメリカ**

——馬車で暮らす人々

—メノナイト・アーミッシュの宗教共同体—

講師プロフィール

F.I.W.C(フレンズ国際労働キャンプ) 関西委員会が紫陽花邑の中に建設した交流(むすび)の家のワークキャンプに、学生時代4年間、熱中。竣工式(1967年7月)当時は委員長。卒業後、草創期の倭印印刷で仕事、技術を身につけ工場の責任者。のちラボ教育センターに転職して現在に至る。業務で短期渡米10回ほど。その内4回はペンシルバニア州でメノナイトの家庭に滞在。

※終了後、大倭会館にて懇親会(参加費1,000円)

■問合せ: TEL 0742-44-0015 (大倭会)

TEL 0742-44-0776 (むすびの家)

あんない

* 月次祭(大倭神宮)

11月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四九〇回裸会

11月8日(日) 文化講演会として行われます。詳しくは右欄をご覧ください。

* 月次祭(大倭神宮)

11月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大本宮)

11月23日(祝) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

訂正

9月号の「寸沙」の中で、大倭病院の初代院長の浜田先生とあるのは、2代院長の間違ひでした。

編集後記

ぶらりと、旅に出きた。

三十年程前、神奈川の叔父の家に鑑姿で現れた常陸坊さんをお訪ねし、群馬の新皇教宮での月次祭に一緒に、中村さん、西川弘二兄弟ほか、皆さんとの楽しいひととき。その和やかさのなかで、反逆の徒として立ち上がった将門さんのころを偲んだ。

帰りそびれて、懐かしい顔の待つ青森まで足を伸ばした。長慶さんの陵では、お供えの握り飯をいただいた折、嗚咽が込みあげた。「お供えされることはあつても、こころがなければ寂しい……」。切ないお気持ちとともに、「一緒に」という思いの大切さが、深くこころに沁み

(齋藤正宏)